

事業実施報告書

事業名 不登校の子どもとその保護者が安心して暮らせる環境づくりモデル事業

1 事業の目的

事業の背景・目的

地域に根差した不登校支援窓口を作り、当事者とその家族が安心できる環境のための中間支援を！

本事業の背景

- ・ 不登校に対応する窓口(学校・医療・福祉・地域団体等)の連携がない
- ・ 当事者と家族が適切な支援につながりづらい

本事業の目的

- ・ 不登校当事者と家族をそれぞれの要望に応じた支援につなぐワンストップ窓口モデル創設をめざす
- ・ 不登校にかかわる団体・支援者の連携

不登校に悩む当事者とその家族にとって学校や既存の窓口での対応が現状に即したものとは言えない場合も多いため、相談が一度で終わってしまったり、どこに相談に行けばいいのかわからなくなったり、窓口をたらい回しにされたり、孤立してしまうようなケースも多くある。そうした孤立をなるべく少なくするよう、個々の状況に応じた支援につなぐことが可能となるような「ワンストップ窓口モデル」の創設をめざす。

そのための第一歩として①「ぷらっとほーむ～さいたま不登校ネットワーク～」としては多くの人の要望に寄り添えるような連携先情報の提供・当事者及び家族向け支援事業実施を目的とする。また、この事業が県域で展開可能となるための基盤として県内の不登校親の会に着目し、そのネットワーク化のための第一段階として②「不登校親の会マップ作り」を目的とした。不登校の家庭にいちばん近い理解者である親の会の声から実際にいま必要とされていることや今できることを明らかにしていくためである。

2 事業内容

(1) 事業の概要

- ① 不登校支援のワンストップ窓口をめざす事業として当事者の不安に寄り添えるよう a)親の会と個別相談、b)居場所事業、c)食支援によるつながりづくり・安心安全の提供 を主として実施。D)保護者向けの学習会も行った。下図の赤字は実施事業。
- ② 県域での支援につなげるべく、基盤となる寄り添いを行っている親の会をマップで可視化。

不登校のご家庭の不安

主要ランキング

- 1 どこに相談すればいい？
学校・行政等に合わない、否定される
- 2 子どもの生活・学習・進路が心配
学力への不安
学校復帰・社会復帰への不安
- 3 家にはかりないでどこかに行っておほしい
誰か人と関わってほしい
ゲームやyoutubeばかりしている
- 4 子ども一人で向き合うのに疲れた
寄り添って何をするの？
いつまで続くの？
- 5 子どもの心をひらきたい
興味関心を引き出すにはどうすればいい？
やりたいことって見つかる？

状態を知りできることを考えよう

親の会で話を聞く 親も仲間が重要	相談先や専門家につなぐ	子どもの現状と段階を知る	どこかに行けるまでまず家で
安心安全を感じると話し始める	無理に外の居場所を探さない	心の回復にゲームも必要	ゲームも人との関わり作り
眠れる食欲あるなら大丈夫	食を通じて関係づくり	いつでも参加可能な居場所	学びたいときは学習支援

時が来れば子どもは自分で動き出す

(2) 事業の流れ

① ぱらっとほーむ～さいたま不登校ネットワーク～の事業（別紙年間カレンダー参照）

- a) 親の会 毎月第三木曜開催 期間内計9回 参加者 65名
- b) 食支援 子ども食堂お弁当配食 毎月2~4回 計27回 配食先135名
お弁当購入・外食同行等 計199回 対象数 358名
県社協長期休暇中子ども食支援 夏・冬2回 対象数 400名 950食
- c) 居場所事業 毎週火曜開催 期間内計30回 参加者 103名
オンライン 毎週金曜開催+不定期 期間内計64回 参加者 155名
- d) 学習支援 毎週火曜開催+不定期 期間内計65回 参加者 140名
- e) 相談・訪問・学校や関係機関等との調整など 随時 計128回
- f) 保護者・地域向け学習会実施 6月映画会@みよし、10月講演会もファシリテート
コミュニティコーピングと社会保障ゲーム実施・ボードゲーム会毎月開催 69名

② 彩おやネットと彩おやマップに関する事業（別紙資料・成果物参照）

- 2025年8月 埼玉県不登校セミナー参加・協力団体と懇談
 2025年9月 主要メンバーで意見交換
 2026年2月 彩おやマップ参加団体で第1回会合=彩おやネット発足





(3) 連携・協力機関

埼玉県教育局指導 2 課、不登校引きこもりを考える埼玉県連絡会、アトリエゆう、Social ChangeAgency、さいたま市浦和地区 CSW、彩おやネット参加の親の会 20 団体

3 成果及び今後の展開

・事業計画に対する成果、効果

- ① ぷらっとほーむ～さいたま不登校ネットワーク～としては不登校に悩む子どもたちやその家族とリアル・オンライン双方でつながりを持ち、当事者の抱えるそれぞれの課題に個々の段階に応じて向き合い支えることができた。期間中に関わった家庭数は 47。相談事業では地域の CSW を紹介したり、発達障害の行政専門職にお越しいただくなどしたことで、次のステップへつなげることもできた。また、居場所に来るお子さんも安心して過ごし、一歩ずつそれぞれの場所から動き出す過程をともに進むこともできた。学習面でも意欲的になったタイミングにうまく合わせて抵抗なく興味ある分野を伸ばすことができた。こうしたことが一人一人の自信につながり、学校復帰した子どもや進路をきめて外に出られた子どももみられ、成長に寄り添えたと思う。(学校復帰がゴールではないので数値は出さない。次のステップに旅立った子は 8 名。) 学習支援では県立高校の普通科への入学もあった。
- ② 県内各地に点在する不登校親の会の連携づくりの一步を踏み出せた。協力 20 団体の可視化されたマップがあることで安心感と参加しやすさを少しでも高めることができたのではと感じる。

・助成事業を行うことにより見えてきた新たな課題など

- ① 個々にお子さんの課題やご家庭の状況が異なるため、きめ細やかな寄り添いと対応をしていくには数が限られるということと、課題によっては専門家でチームを組んでの情報交換が必要となる場合があり日程調整や意見交換・具体的対応の難しさがあるということを感じた。中間支援団体としては専門家につなぐ前の「困りごとの整理」と「動き出すまでの助走のお手伝い」に的をしぼるのが適切だろうと感じた。どのお子さんもお家庭も「人の助けを借りていい」と安心して思える環境づくりをするために、個人情報に配慮しつつ活動の様子をわかりやすく情報発信していく工夫も必要だと思った。
- ② 彩おやネットの土台づくりはマップ作製で叶ったものの、親の会**自体**が各地域で運営にさまざまな課題があり、会場費やおやつ代・イベントの周知・行政等との連携などに腐心していることがわかった。不登校当事者のいちばんの理解者である親の会の運営基盤が確固たるものになるような形作りができてこそその県域ワンストップ窓口を各地に拡げることが可能だと思うので、親の会の安定開催と存続等に向け計画そのものを見直すべきだと考えた。

全体として個別の成果はより大きくなったと感じられた。しかし、子ども向けの支援だけでなく家族単位で不登校に向き合い支えるには保護者支援の充実が今後の急務であると考えている。